

# 工業高校生の学校生活とキャリア意識 —地域比較を中心に—

尾川 満宏

山口県立大学学生支援部

## Relationships between School Life Styles and Career Consciousnesses of Technical High School Students in Japan : With a Focus on Differences among Areas

Mitsuhiro OGAWA

The Student Support Center of Yamaguchi Prefectural University

### 要旨

本稿は、小規模地方都市と大都市における工業高校生の学校生活とキャリア意識の関係を明らかにするものである。

1990年代後半より、一部の生徒層における学校適応が低下し、またキャリア意識の不明確な生徒が問題になるなど、高校における進路指導の困難が指摘されてきた。こうした背景から、本稿では工業高校の生徒に焦点を当てて質問紙調査を実施し、生徒の学校生活とキャリア意識などとの関連について、地域比較を通じて検証した。

その結果、生徒のキャリア意識に加えて高校教育に対する認識が、かれらの学校生活と密接に関連していることや、その関連のあり様は地域に応じて異なることが明らかになった。加えて、分析結果をふまえ、地域や学校の実態に応じた指導の内容や方法を柔軟に検討する必要性を指摘した。

キーワード：工業高校、学校生活、キャリア意識、地域比較

### Abstract

This article verifies relationships between school life styles and career consciousnesses of technical high school students in a small local city and an urban city of Japan.

Since the late of 1990s, the career guidance in high schools has become difficult because the school adaptation of a part of students has declined and their career consciousness has become unclear. In these contexts, this research project conducted a questionnaire which focused on the technical high school students. In this article, we analyzed students' career consciousnesses, school life styles and relationships between them through the area comparison.

Findings from the analyses are below; not only students' career consciousnesses but also their cognition forward the high school education have strong relationships with students' school life styles. In addition, the pattern of the relationships is different among the two areas. As a conclusion which is based on these findings, the suggestion to promote career education in the context of each locality was provided.

Key Words; technical high school in Japan, school life, career consciousness, area comparison

### 1. 問題の所在

本稿は、工業高校の生徒に対する質問紙調査をも

とに、かれらの学校生活とキャリア意識の関係を地域の違いに着目しながら明らかにするものである。

1990年代後半以降、高卒就職をめぐる状況の厳しさが相次いで報告されてきた。とりわけ2000年代以降の高卒無業者研究は、労働市場や雇用システム、社会構造の問題に焦点を当ててようになった。同時に、大都市部の進路多様校や専門高校を中心的なフィールドとして、進路未定者を輩出する学校や進路未定へと陥る生徒の特性を明らかにしようとしてきた。

高校の内部過程を扱ってきた先行研究によると、1980年代までは学校内でメリトクラティックな職業選抜が機能していた(荻谷 1991)。しかしながら2000年代以降、学校コミットメントがきわめて低い「パートタイム生徒」(堀 2003)の出現などを背景として従来の選抜方式が機能不全におちいるとともに、進路指導における「自己決定」原則が指導にのってこない生徒たちの「フリーター志望」を追認する結果となってしまう、進路未定へと帰結させるといった矛盾が指摘されている(荻谷ほか 2002)。あるいは、脱学校的な生徒の現状を追認する方法でしか進路指導を展開できない学校像・生徒像が強調されてきた(千葉・大多和 2007)。

高卒就職を扱う先行研究は、生徒たちの進路がいかにして決定されるのかを明らかにしようとしてきた。そうした研究において、生徒の進路意識は重要な説明変数として扱われてきた。あるいは、生徒の職業アスピレーションの変容に対する学校生活や社会意識の規定力を探る研究もある(片瀬 2005など)。しかし、進路意識をはじめとする職業生活全体への展望(本稿ではこれを、キャリア意識と呼ぶ)が高校生活を媒介して進路決定に影響する可能性はあまり強調されてこなかった。

そこで本稿では、地方都市と大都市の工業高校で実施された質問紙調査を用いて、生徒のキャリア意識と高校生活の関連を分析する。本稿の関心は、工業高校生の進路決定を左右する要因ではなく、キャリア意識と高校生活の関連を明らかにすることにある。とくに、生徒の学校生活の実態とキャリア意識を構造的に把握したうえで、進路多様校に関する先行研究が指摘してきた「フリーター志望」のようなキャリア意識は、生徒の学校不適応と関連しているのか、あるいはどういったキャリア意識が向学校的な生活態度と関連しているのかを検証する。

さらに、本稿では地方都市と大都市という地域の違いに着目して分析をすすめていく。上記の進路指導・進路形成上の課題や現象は、全国どこにでも一樣に見受けられるわけではない。地方高校生の進路意識を都市部高校生のそれと比較し分析を行った日本労働研究機構(2003)は、首都圏高校生よりも地方高校生のほうが学校へのコミットメントが高く、希望進路が叶わなくても他の進路に変更するため、フリーターになる者が少ないという知見を提出している。さらに、長須

(2003)は富山県で高校教員の語りを収集し、大都市の高校生とは異なる地方高校の生徒像を提示した。

これらの研究は、都市部とは異なる地方の高校生の実態を開示し、ステレオタイプの語られてきた高校生像を脱構築する契機となりえた。ところが、質問紙調査の単純な数値比較のみで結論を得る、生徒像の記述が表層的なレベルにとどまるなど、地方高校生の生活や進路意識に迫る本格的な検討は着手されなかった。後に詳しく分析するような、地域や学校による高校生活の差異は、有海(2012)による進学校の分析を除いて近年注目されてこなかった。したがって本稿では地方/大都市の高校像、高校生像の違いについてもその一端を明らかにしたい。そのために、キャリア意識そのものや、キャリア意識と学校生活との関連に地域に応じた違いが存在するのか否かを統計的に検証する。

## 2. 研究の方法

本稿の分析データは、中国地方X県に所在する公立A工業高等学校と、関西圏の大都市に所在する公立B工業高等学校における、生徒対象の質問紙調査から得られたものである。本調査は、2011年10月から2012年1月にかけて、集合自記式で実施された。本稿においてこの2校を選択した主たる理由は、入学者の学力レベルが同程度の学校のみを分析対象とすることで、地域比較をより精緻に行うためである。

地方都市に所在するA工業は、県内偏差値40前後の学力底辺校であるが、専門高校としては伝統校で、これまで多くの若年労働力を地域労働市場へと輩出してきた<sup>1)</sup>。卒業時点での進路未定者はおよそ各年1.0%程度と、ごく少数にとどまっている。高卒無業者研究の対象となってきた都市部進路多様校と比較すると、A工業の進路未定率はきわめて低いといえることができる。

さらに、A工業が所在する地域圏には地元企業が一定程度残っており、それによって地元の高卒労働市場は支えられている。地方によっては、地元求人不足のために県外への流出をともなう就職(進学)によってしか生徒の進路を確保できない学校群が無視できない規模で存在する。こうした観点からすると、本稿で扱うA工業は、量的な面で一定程度地元の高卒労働市場との需給バランスが取れている地域の学校である<sup>2)</sup>。

他方、大都市に所在するB工業は県内偏差値が40弱であり、A工業と同様に学力的には地域の下位層が多く入学してくる学校である。B工業は伝統的な機械系学科をはじめとして女子生徒を多く抱えるデザイン系の学科など多彩な学科で構成されており、「工業高校=男子の学校」という従来のイメージには必ずしも収斂されない学校である。B工業が所在す

る地域の高卒労働市場はA工業の地域のそれよりも豊かであるが、調査当時のB工業の進路未定率はおよそ20.0%前後である。高卒無業者研究で取り上げられてきた学校イメージと重なる学校である。

本調査はそれぞれの学校において全校調査として実施されたが、本稿では分析対象を両校の1年生と2年生に限定した。3年生を分析対象から除外した理由は、本調査が実施された時期が3年生にとっては進路の決定期であり、進路決定の有無や決定進路への満足・不満足が回答に影響する可能性が高いからである。

なお、A工業とB工業にはそれぞれきわめて特徴的な学科が設置されている。たとえば、ほぼすべての生徒が女子である学科や、就職率が他学科に比べ極端に低く実質的には進学準備を行っている学科などである。各学校の特色をとらえるためにはそうした学科が重要であるが、本稿の主要な目的は生徒の学校生活やキャリア意識に地方／大都市という地域差があるかどうかを検討することにある。したがって、地域比較をより精緻に行うため特異な学科を除外してデータセットを作成した。その結果、就職率や生徒の男女比率の違いを可能な限り小さくした、電気系、機械系、電子系、その他の学科に大別される602名の回答からなるデータセットを用いて分析することとする(表1)。

### 3. 生徒たちの高校生活

#### 3-1 生徒像の概観

本節では、調査対象校である地方A工業と大都市B工業の生徒像について確認する。

まずは成績である。表2では、中学3年生のころと現在の成績について、学年内の位置を自己評価で回答してもらった結果を示した。これによると、両校に入

学してきた生徒たちのかなりの部分が、中学時代の成績下位層だったことが分かる。この結果は、前節で述べた両校の位置づけを再確認させるものでもある。

次に、表3には高校生活の様子を問うた質問への回答結果を示した(「とてもあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの5件法平均値)。地方A工業と大都市B工業の生徒の間にはかなり多くの項目において統計的に有意な差が確認でき、総じてA工業のほうが学校生活に対するコミットメントが高いことが分かる。すなわち、授業の予復習や授業参加、部活動や学校行事への積極性、学校の友人との親密さなどの側面において、地方都市に所在するA工業の数値が高くなっている。逆に、学習内容の理解度の低さや学校からの離脱傾向、あるいは学校外消費空間への親和性などの側面では、大都市に所在するB工業の数値が高くなっている。このような結果は日本労働研究機構(2003)や長須(2003)の知見と符合する。

しかしながら、興味深いことに「できるだけよい成績を取ろうとしている」「資格試験や検定のためによく勉強する」などの項目では学校間の差異が認められない。この結果については、生徒たちが学校の授業や資格にどのような意味づけをしているかが解釈の鍵になると考えられる。

そこで、表4に高校教育への意味づけに関する質問への回答を示した(5件法平均値)。これによれば、大都市B工業の生徒よりも地方A工業の生徒のほうが、高校の授業は「将来の仕事に役立つ」「大学などへの進学に役立つ」「高校で取得する資格は、将来にとって重要だ」と考えている。つまり、大都市の工業高校生よりも地方の工業高校生のほうが、学校の職業的レリバンスやキャリア形成への効果を認識、ないし期待しているといえる。

表1 分析データの概要(％、括弧内実数)

学校	地方A工業	大都市B工業	合計
	56.0	44.0	100.0(602)

  

性別	男	女	合計
	89.3	10.7	100.0(602)

表2 成績の学年内順位に関する自己評価(％、括弧内実数)

	上の方	中の上	中くらい	中の下	下の方	計
中学3年生のころ	1.3	6.1	24.2	31.3	37.1	100.0(595)
現在(5教科)	9.7	17.9	32.2	22.2	18.0	100.0(599)
現在(専門科目)	10.1	14.2	35.0	21.0	19.8	100.0(572)

表3 高校生活の地域比較

	地方 A 工業	大都市 B 工業	
学校の勉強の予習・復習をよくする	2.46	2.23	*
授業の内容は理解できている	3.31	2.91	**
きちんとノートを取りながら授業を聞いている	4.02	3.58	**
できるだけよい成績を取ろうとしている	3.87	3.84	
資格試験や検定のためによく勉強する	3.16	3.25	
部活動をがんばっている	3.49	2.48	**
文化祭や体育祭などの行事には積極的に参加する	3.62	3.27	**
先生とよく会話をする	2.98	3.07	
先生に進路について相談する	2.38	2.26	
コースや選択授業は希望進路にあったものを選ぶ	3.25	2.91	**
校則はきちんと守っている	4.07	3.82	*
学校でいつも一緒に行動する友人がいる	4.28	3.98	**
学校外ではいつも学校の友人と遊ぶ	3.49	2.90	**
授業中、私語や居眠りをする	2.93	3.40	**
授業中、携帯電話でメールの読み書きをする	1.64	1.91	*
授業に出席するのがめんどうだと思ふことが多い	3.23	3.08	
欠点（赤点）を取ってしまうことがある	2.91	3.67	**
学校をやめたいと思ふことがよくある	2.55	2.72	
高校の卒業資格さえもらえればよい	2.54	2.94	**
テレビゲームやネットゲームをよくする	3.10	3.10	
ふだんアルバイトをしている	1.24	2.99	**
ゲームセンターやカラオケによく行く	2.50	3.02	**
いつもオシャレに気をつけている	2.77	2.93	

注：検定の結果、有意確率が0.01未満の場合に\*を、0.001未満の場合に\*\*を付す。以下同様。

表4 高校教育に対する意味づけの地域比較

	地方 A 工業	大都市 B 工業	
高校の授業は、将来の仕事に役立つ	4.03	3.29	**
高校の授業は、大学などへの進学に役立つ	3.87	3.26	**
高校で取得する資格は、将来にとって重要だ	4.53	4.28	**
高校は、勉強をがんばるところだ	3.97	3.46	**
高校は、友達をつくる場所だ	3.90	3.77	
高校は、上下関係を学ぶ場所だ	3.60	3.37	
高校は、ガマンすることを学ぶ場所だ	3.37	3.30	
おなじ高校を卒業した人であれば、将来の暮らしぶりに大きな差はない	2.24	2.37	

しかしながら、注目すべきは「高校で取得する資格は、将来にとって重要だ」の平均値が両校においてももっとも高いことである。高校で取得する資格は、大都市B工業の生徒にとっても重要なのである。表は割愛しているが、2年生に限定して比較を行うと当該項目の差が有意でなくなる（A工業：4.38、B工業：4.24、 $p=0.218$ ）。値自体は低下しているものの高い水準を保っており、資格の有用性に対する認識が地域を問わず学年上昇にともなって（学校カリキュラムによって）平準化されている可能性を指摘できる。表3で確認したように、良い成績や資格試験に向けた努力に有意な地域差は確認されなかつ

た。これらの結果から、高校で得られる専門性、あるいはそれを示すシグナルとしての「資格」を重要視させる工業高校の社会化機能を読み取ることができる。本稿の関心からは、こうした生徒の「資格」や「専門性」に対する認識と学校生活との関連性を検討する必要があるだろう（第5節で詳述）。

### 3-2 高校生活の構造

それでは、高校生活の意識や態度はどのような構造として把握できるだろうか。表3の項目を用いて因子分析を行ったところ、6つの因子が抽出され、第4因子までを採用した（表5）。

表5 高校生活に関する因子分析の結果

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	第6因子
先生に進路について相談する	<b>0.750</b>	0.091	0.118	0.044	-0.155	0.015
先生とよく会話をする	<b>0.697</b>	0.066	0.206	-0.151	0.064	0.194
文化祭や体育祭などの行事には積極的に参加する	<b>0.588</b>	0.072	-0.094	-0.042	0.199	0.150
部活動をがんばっている	<b>0.464</b>	-0.179	-0.372	0.067	0.070	-0.108
コースや選択授業は希望進路にあったものを選ぶ	<b>0.433</b>	0.117	0.042	-0.091	-0.002	-0.165
できるだけよい成績を取ろうとしている	-0.019	<b>0.723</b>	-0.035	-0.044	0.041	-0.017
資格試験や検定のためによく勉強する	0.222	<b>0.578</b>	-0.027	-0.031	-0.133	0.069
きちんとノートを取りながら授業を聞いている	-0.054	<b>0.518</b>	-0.224	0.076	0.160	-0.159
学校の勉強の予習・復習をよくする	0.248	<b>0.453</b>	-0.079	0.175	-0.125	-0.147
授業中、携帯電話でメールの読み書きをする	0.130	-0.123	<b>0.609</b>	0.109	-0.009	-0.217
校則はきちんと守っている	-0.017	0.202	<b>-0.512</b>	-0.047	0.181	0.141
ふだんアルバイトをしている	-0.090	0.165	<b>0.505</b>	-0.069	-0.132	0.229
ゲームセンターやカラオケによく行く	0.004	-0.075	<b>0.476</b>	0.044	0.225	0.079
授業中、私語や居眠りをする	0.126	-0.201	<b>0.456</b>	-0.011	0.113	0.039
いつもオシャレに気をつけている	0.087	0.142	<b>0.419</b>	0.143	0.247	-0.032
学校をやめたいと思うことがよくある	0.003	0.042	0.048	<b>0.751</b>	-0.049	0.125
授業に出席するのがめんどろだと思ことが多い	-0.092	-0.058	0.132	<b>0.569</b>	0.088	-0.059
高校の卒業資格さえもらえればよい	-0.073	0.095	0.026	<b>0.516</b>	-0.010	0.299
学校でいつも一緒に行動する友人がいる	-0.097	0.034	0.089	-0.037	0.858	0.010
学校外ではいつも学校の友人と遊ぶ	0.088	-0.089	0.037	0.054	0.531	-0.045
欠点（赤点）を取ってしまうことがある	0.148	-0.043	-0.052	0.122	0.013	0.735
授業の内容は理解できている	0.017	0.327	0.122	-0.075	0.063	-0.534
回転後の負荷量平方和	3.246	3.121	2.971	2.620	2.064	2.646

注：因子抽出法：重みなし最小二乗法、回転法：Kaiserの正規化を伴うプロマックス法 因子負荷量 0.35以上採用

表6 高校生活に関する因子間相関行列

	学校適応	学業重視	遊び・不まじめ	学校離脱
学校適応	—			
学業重視	0.457	—		
遊び・不まじめ	-0.233	-0.293	—	
学校離脱	-0.303	-0.331	0.426	—

第1因子は「先生に進路について相談する」「文化祭や体育祭などの行事には積極的に参加する」「部活動がんばっている」などの項目から構成されているため【学校適応】と命名した。第2因子は「できるだけよい成績を取ろうとしている」「資格試験や検定のためによく勉強する」「きちんとノートを取りながら授業を聞いている」などの項目から構成されているため【学業重視】と命名した。第3因子は「授業中、携帯電話でメールの読み書きをする」「ふだんアルバイトをしている」「ゲームセンターやカラオケによく行く」などの項目から構成されているため【遊び・不まじめ】と命名した。第4因子は「学校をやめたいと思うことがよくある」「授業に出席するのがめんどうだと思うことが多い」「高校の卒業資格さえもらえればよい」という項目から構成されているため【学校離脱】と命名した。

表6の因子関相関行列をみると、前者2因子は向学校的な特徴を示す因子、後者2因子は脱学校的な特徴を示す因子であると大別できるだろう。表は割愛しているが、学校生活4因子を地域間で比較すると【学校適応】では地方A工業が、【遊び・不まじめ】では大都市B工業がより高い数値を示した。おおむね先行研究の結果と同様の傾向が観察されるといえるだろう。

## 4. 生徒たちのキャリア意識

### 4-1 進路希望・キャリア意識の概観

次に、将来の仕事や生活をめぐる生徒たちのキャリア意識を検討しよう。表7には、中学3年時、高校入学時そして現在の各時期における、高卒後の進路希望を示した。パネル調査ではないため回答者の記憶を手がかりにせざるを得ないが、就職希望者が学年上昇を通じて増加している。1年生には「専門学校・各種学校」希望者が20%ほどいるが、2年生では15%に減少し、「就職」希望者が増えている。近年、中村編(2010)などが指摘している専門高校からの「4年制大学」進学希望者は、今回の場合どの時点をとっても1割に満たず、2年生では減少している。また、「考えていない」は中学3年生のころや高校入学時に比べれば減少しているものの、1年生と2年生の間ではほとんど変化がない。進路希望に顕著な地域差は確認されなかった。

それでは、先に見た高校生活同様、生徒のキャリア意識も地域間で異なるのだろうか。表8では、将来の仕事や生活をめぐる展望について地域比較を行った(5件法平均値)。キャリア意識について統計的に有意な差がみられたのは、いくつかの項目にすぎない。大都市B工業の値は「ずっと県内で働きたい」「将来は独立して自分の店や会社を持ちたい」「有名になりたい」「海外で仕事をしたい」の項目で地方A工業よりも高く、「学校で勉強したことと関係がある仕事につきたい」の1項目で低い。「県内で」「海外で」という項目の両方で大都市B工業の値が高いことは、進路選択の「ローカリズム」(中村編 2010)や「夢追い型進路形成」(荒川 2009)が大都市に特徴的な現象である可能性を示唆している。つまり、進路の選択肢を多方面に見出す大都市B工業の生徒の様子は、「ローカルな就職機会や労働形態」によって多様なキャリアやライフコースを展望しづらい地方や地域(尾川 2011、pp.266-267)の生徒像とは異質である。従来は地方高校生の地元志向などが検討されてきたが(富江 1997)、地方A工業の生徒たちの生活地域へのこだ

表7 各時期における高卒後進路の希望 (%)

	就職	専門学校 各種学校	短期大学 高専編入	4年制 大学	フリーター	その他	考えて いない
中学3年生のころ	53.8	22.1	5.8	8.7	1.5	1.9	19.9
高校入学時	66.6	17.5	5.8	8.7	1.4	1.9	12.6
現在(1年生)	70.6	20.1	5.8	8.9	1.0	1.9	8.6
現在(2年生)	76.2	15.8	3.3	6.2	1.8	2.9	8.4

表8 キャリア意識の地域比較

	地方 A 工業	大都市 B 工業	
ずっと県内で働きたい	3.09	3.43	*
一人暮らしをしたい	3.87	3.90	
いろんな仕事や職場を経験したい	3.29	3.42	
学校で勉強したことと関係がある仕事につきたい	3.58	3.05	**
親（保護者）とおなじような仕事につきたい	2.35	2.35	
将来は独立して自分の店や会社を持ちたい	2.52	2.85	*
自分に合わない仕事はしたくない	3.85	4.04	
有名になりたい	2.72	2.99	*
海外で仕事をしたい	1.99	2.53	**
仕事に「生きがい」を感じたい	3.81	3.70	
やりたい仕事ならフリーターでもかまわない	2.38	2.33	
人よりも、高い給料をもらいたい	3.91	3.97	
仕事よりも、趣味や私生活を大事にしたい	3.33	3.44	
仕事を選ぶときは、仕事内容よりも給料など働く条件を重視する	3.21	3.24	
将来のことを考えるよりも、今を楽しく生きたい	3.36	3.53	
将来も、現在の友達といつも付き合っていると思う	3.53	3.73	
今の世の中、定職につかなくても暮らしていける	1.97	2.02	
いったん仕事をやめても、またすぐに見つけられる	1.81	1.77	
好きなことでなければ、仕事は続けられない	3.08	3.12	
「自分に合った仕事」はかならずある	3.90	3.86	
自分がつくことのできる仕事は限られている	3.34	3.32	

わりはそう強くない。この背景には、工業高校生にとって「望ましい」進路のひとつとされてきた「大企業技能職」<sup>3)</sup>の就職機会は、大都市を中心とした県外に存在するという生徒の認識があると推測できる。とはいえ、ここで強調したいのは、将来の仕事や生活をめぐるキャリア意識に必ずしも大きな地域差は確認されなかったことである。

#### 4-2 キャリア意識の構造

それでは、生徒たちのキャリア意識はどのような構造として把握できるだろうか。表8の項目を用いて因子分析を行った結果、6つの因子が抽出され、第4因子までを採択した（表9）。

第1因子は「いったん仕事をやめても、またすぐに見つけられる」「今の世の中、定職につかなくても暮らしていける」などの項目から構成されているため、《楽観的態度》と命名した。第2因子は「仕事を選ぶときは、仕事内容よりも給料など働く条件

を重視する」「人よりも、高い給料をもらいたい」などの項目から構成されているため、《待遇重視》と命名した。第3因子は「将来は独立して自分の店や会社を持ちたい」「有名になりたい」などの項目から構成されているため、《「夢追い」的態度》と命名した。第4因子は「『自分に合った仕事』はかならずある」「好きなことでなければ、仕事は続けられない」「自分に合わない仕事はしたくない」などの項目から構成されているため《適性重視》と命名した。

表は割愛しているが、これらの因子を地域間で比較すると、《「夢追い」的態度》において大都市B工業がやや高いものの大きな違いは観察されなかった。

表 9 キャリア意識に関する因子分析の結果

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	第6因子
いったん仕事をやめても、またすぐに見つけられる	<b>0.780</b>	0.068	0.047	-0.069	-0.039	0.027
今の世の中、定職につかなくても暮らしていける	<b>0.765</b>	0.029	0.036	-0.042	0.032	-0.003
やりたい仕事ならフリーターでもかまわない	<b>0.375</b>	-0.018	0.009	0.236	0.052	-0.021
仕事を選ぶときは、仕事内容よりも給料など働く条件を重視する	0.073	<b>0.712</b>	0.003	-0.170	-0.064	0.127
人よりも、高い給料をもらいたい	-0.220	<b>0.576</b>	0.134	-0.022	-0.018	0.089
仕事よりも、趣味や私生活を大事にしたい	0.100	<b>0.441</b>	0.023	0.175	0.045	-0.167
将来のことを考えるよりも、今を楽しく生きたい	0.193	<b>0.364</b>	-0.064	0.162	0.119	-0.015
将来は独立して自分の店や会社を持ちたい	0.056	-0.079	<b>0.692</b>	0.012	0.093	-0.023
有名になりたい	-0.080	0.094	<b>0.686</b>	0.061	0.048	-0.090
海外で仕事をしたい	0.202	0.012	<b>0.565</b>	-0.091	-0.129	-0.010
「自分に合った仕事」はかならずある	-0.034	-0.070	-0.019	<b>0.601</b>	-0.077	0.092
好きなことでなければ、仕事は続けられない	0.163	0.039	-0.057	<b>0.565</b>	-0.037	-0.086
仕事に「生きがい」を感じたい	-0.163	-0.025	0.203	<b>0.439</b>	-0.001	0.177
自分に合わない仕事はしたくない	-0.085	0.193	0.044	<b>0.436</b>	0.063	-0.090
ずっと県内で働きたい	-0.012	0.110	-0.012	0.000	0.616	0.112
一人暮らしをしたい	0.052	0.060	-0.043	0.194	-0.401	0.176
親（保護者）とおなじような仕事につきたい	0.181	-0.160	0.104	0.006	0.375	0.215
自分がつくことのできる仕事は限られている	0.076	0.240	-0.171	0.202	0.025	0.006
学校で勉強したことと関係がある仕事につきたい	-0.037	0.073	-0.127	-0.041	0.169	0.629
いろんな仕事や職場を経験したい	0.112	-0.023	0.075	0.143	-0.107	0.397
回転後の負荷量平方和	1.789	1.840	2.119	1.979	0.816	1.070

注：因子抽出法：重みなし最小二乗法、回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法 因子負荷量 0.35 以上採用

表 10 キャリア意識に関する因子相関行列

	楽観的態度	待遇重視	「夢追い」的態度	適性重視
楽観的態度	—			
待遇重視	0.078	—		
「夢追い」的態度	0.258	0.356	—	
適性重視	0.077	0.367	0.423	—

## 5. 高校生活と諸変数の関連

では、以上に見てきた諸変数は、どのような相互関係にあるのだろうか。加えて、それら変数間の関係は、2つの調査地域（調査校）において同じなのだろうか。

冒頭で示した本稿の問題関心に即して検証するために、高校生活4因子の得点とキャリア意識4因子の得点との相関係数を地域（学校）ごとに算出し、並置した（表11）。それらの変数に加えて、学業成績（5教科成績および専門科目成績）

と、分析の過程で重要性が明らかになった「高校で取得する資格は、将来にとって重要だ」「学校で勉強したことと関係がある仕事につきたい」の2項目も含めて検証した。

### 5-1 学校生活とキャリア意識などとの関連

まず、学校適応とキャリア意識の関連について、冒頭の関心に即して検証しよう。「フリーター志向」などに代表されるキャリア意識が学校不適応と関連しているか否かについては、〈楽観



的態度」と学校生活4因子との関連から確認することができる。表からは、《楽観的態度》が地方A工業においても大都市B工業においても【遊び・不まじめ】と【学校離脱】と関連していることがわかる。つまり、将来の職業生活に対して危機感を持たず、状況によってはフリーターでも仕方がないと考えている生徒は、地域に関係なく脱学校的な生活を送ってしまったり「学校をやめたい」と思ったりしてしまう可能性が高いということである。これは大都市進路多様校で実施された先行研究の調査結果とおおむね一致する結果となっている。

しかし、楽観的なキャリア意識をもつようになれば向学校的な生活態度が崩れてしまうと断言するのは、必ずしも適切ではない。なぜなら、地方A工業においても大都市B工業においても《楽観的態度》は【学校適応】や【学業重視】とほとんど相関関係を有していないからである。つまり、楽観的なキャリア意識は脱学校的な生活態度をうながす可能性があるが、向学校的な生活態度に常に支障をきたすわけではない。現代の工業高校生は、向学校的であっても脱学校的であっても、流動的なキャリアを渡り歩くことになる可能性を否定していないのである。

他方で、《「夢追い」的態度》と《適性重視》はどちらの高校でも【学校適応】と正の相関関係を有している。つまり、仕事での大成功を望んだり“規範的”なキャリア意識を有している生徒ほど、教師と進路について話し合ったり、学

校生活全般に積極的であるということである。

ただし、キャリア意識よりも明瞭な関連を示しているのは、高校教育のレリバンスに対する認識である。表11から「高校で取得する資格は、将来にとって重要だ」と考える生徒ほど、また「学校で勉強したことと関係がある仕事につきたい」と考える生徒ほど、向学校的な生活態度を促進し脱学校的な生活態度を抑制していることがわかる。この傾向にも地域の違いがない。つまり、工業高校において学校に適応し学業に取り組むためには、生徒の「資格志向」や「専門性志向」を育成することが有効だといえるかもしれない。単純な相関係数のみで判断することには慎重である必要があるが、本稿の分析においてはキャリア意識よりも高校教育のレリバンスに対する認識のほうが、学校生活との関連がより明瞭なのである。

### 5-2 地域による違い

次に、学校生活とキャリア意識その他項目との関連における地域間の違いについて、やや単純ではあるが表11をもとに確認しておきたい。

まずはっきりと分かるのは、学業成績と学校生活4因子との関連である。両地域において学業成績と【学業重視】が密接に関連するのは当然としても、地方A工業では【学校適応】との関連が認められない。すなわち、学業成績が振るわなくても、地方A工業の生徒は他の手段や場面を通じて学校生活に積極的に取り組むことが

表11 高校生活4因子と各種変数との相関

	地方A工業				大都市B工業			
	学校適応	学業重視	遊び・ 不まじめ	学校離脱	学校適応	学業重視	遊び・ 不まじめ	学校離脱
成績_5教科	0.125	0.351 **	-0.183 *	-0.289 **	0.282 **	0.406 **	-0.295 **	-0.270 **
成績_専門科目	0.108	0.281 **	-0.185 *	-0.325 **	0.349 **	0.450 **	-0.234 **	-0.263 **
楽観的態度	-0.001	-0.064	0.245 **	0.236 **	0.115	-0.098	0.215 *	0.220 *
待遇重視	0.061	-0.023	0.164 *	0.144	0.172	0.290 **	0.020	0.162
「夢追い」的態度	0.222 **	0.072	0.210 **	0.043	0.308 **	0.224 *	0.103	0.035
適性重視	0.220 **	0.097	0.082	0.020	0.317 **	0.328 **	0.052	-0.020
高校で取得する資格は、将来にとって重要だ	0.302 **	0.321 **	-0.208 **	-0.299 **	0.366 **	0.312 **	-0.342 **	-0.312 **
学校で勉強したことと関係がある仕事につきたい	0.323 **	0.313 **	-0.229 **	-0.389 **	0.481 **	0.338 **	-0.333 **	-0.320 **

できるということだろう。たとえば、尾川ほか(2012)はある地方商業高校での調査から、生徒の圧倒的な部活動参加率を見出しており<sup>4)</sup>、部活動なども学校適応上重要な役割を果たしていると考えられる。これに対して、大都市部のB工業では、学業成績とくに専門科目が【学校適応】と明瞭に関連している。大都市B工業では、“勉強できる”か否かが学校生活への適応に大きく関わっているといえるだろう。

さらに、キャリア意識と学校生活の関連にも地域差が観察できる。すなわち、地方A工業ではキャリア意識4因子が【学業重視】と関連していないが、大都市B工業では<待遇重視><「夢追い」的態度><適性重視>というキャリア意識が【学業重視】と関連している。大都市B工業と比べると、地方A工業ではキャリア意識が学業への動機づけになりづらいということである。また、地方A工業では<楽観的態度><待遇重視><「夢追い」的態度>というキャリア意識が【遊び・不まじめ】という生活態度と関連しているが、大都市B工業では<楽観的態度>以外、当該生活態度と関連がない。地方A工業と異なり、大都市B工業ではキャリア意識と脱学校的な生活態度との関連が曖昧である。そのため、いくら「望ましい」キャリア意識を育成しても、脱学校的な生徒の生活態度を改善することは難しいのかもしれない。

以上の結果より、キャリア意識を醸成することで学業への動機づけを強めたり、向学校的な生活を促したりするキャリア教育の意図は、すべての地域や学校において一様に期待通りの結果をもたらすわけではない可能性が示されたといえるだろう。キャリア政策の理念からすればやや厳しい現実といえるかもしれないが、各地域・各学校の状況に応じた柔軟な指導内容・指導方法を模索することが肝要だということである。また、それにともなって、各地域・各学校で生徒の状況や特質を把握するための生徒理解が指導の基盤となるべきことも、今回の分析結果から示唆されたことである。

## 6. 考察と課題

以上、本稿ではある地方都市に所在するA工業高校とある大都市に所在するB工業高校で実施された生徒向け質問紙調査の分析から、生徒の学校生活とキャリア意識などとの関連を検討してきた。明らかになったのは以下の諸点である。

第一に、工業高校生の高校生活の様子は、地方A工業と大都市B工業で大きく異なっていた。いくつかの先行研究が指摘してきたように、地方の高校

生は大都市の高校生よりも学校コミットメントが高く、脱学校の度合いは低いようである。しかしその一方で、そうした単純な区別に留保を迫る側面も見出された。すなわち、高校生活を異なる態度で経験している両校の生徒たちは、ほとんど一様に「資格」を重要視していたのである。このことは、生徒を工業人として技術的・精神的に社会化してゆく工業高校の制度的な機能(カリキュラムの影響力)が地域を問わず強力に働いていることを示唆している。

第二に、生徒たちのキャリア意識に、はっきりとした地域差は確認されなかった。先行研究のなかには単純集計を用いて地方/大都市の高校生の進路意識の違いを指摘するものがあるが、統計的な検定を行った本稿の分析からは、地方A工業と大都市B工業において、そうした違いは明白には確認されなかった。大都市B工業では<「夢追い」的態度>が相対的に存在感を示していたものの、キャリア意識についての回答は同じような傾向を示していた。

第三に、高校生活とキャリア意識の関連を検討したところ、生徒の学校適応を中心として、いくつか重要な関連性が明らかとなった。すなわち、これまで問題視されてきた「フリーター志向」など楽観的なキャリア意識は向学校的な生活態度を崩すものではなく、また学校適応には「資格」や「専門性」に対する認識が密接に関連していることが明らかになった。これは地方A工業にも大都市B工業にも共通する傾向であり、工業高校の特性と考えることができる。一方、地方A工業と大都市B工業の間には異なる傾向も観察された。すなわち、地方A工業の生徒における【学業重視】はキャリア意識の醸成によって変化するわけではないことや、大都市B工業の生徒における【遊び・不まじめ】はキャリア意識の醸成によって改善されるわけではない可能性が推察された。ここから、各地域・各学校の状況に応じた指導内容・指導方法を柔軟に編みだす必要性や、その基盤として生徒理解が重要であることが確認された。

本稿は、希望進路を決定する要因の検討ではなく、どのような生活態度がどのようなキャリア意識と関連しているのかを検討してきた。しかしながら、本稿の分析は変数相互の作用を考慮していない相関分析にとどまっている。各変数の影響関係を整理・統制するなど、より精緻な分析が必要であるが、この課題は別稿にゆずりたい。また、本稿で扱ったのは地方と大都市の工業高校1校ずつであり、上述の結論は仮説の域を出ない。加えて、「地方」と一括りに論じられないのが地方の特質であり、今後は「地域性」ないし「ローカルティ」といった概念をふまえた分析も必要となろう。

とはいえ、工業高校生のキャリア意識と学校生活

は密接に関連しており、またその関連は地域によって異なることを実証的に示唆した点で、本稿は意義ある知見を提供した。そのうえで、次の2点の研究上の展開を構想することが可能である。ひとつは、調査校を増やすことによって地方／大都市の差異に関する知見の一般化可能性を高めてゆく、あるいはその過程で本稿の意義と限界をリフレクシブに考察してゆくことである。

いまひとつは、地方高校におけるインテンシブなフィールドワークの可能性である。冒頭では先行研究が地方高校を表層的にしか扱っていないと述べたが、本稿も生徒による質問紙への回答に依存しており、その意味ではやはり調査校が置かれた地域的な特徴やローカルな文脈に十分迫ったとはいえない。あるいは「キャリア意識→高校生活」という単純な枠組みのみで、生徒の態度形成の過程にアプローチできるわけではない。生徒たちが生きる学校や社会、生活世界には量的に把握しにくい部分が多いだろう。それゆえ、今後は複雑に構築される学校空間およびその内外で行われる地方高校生の進路形成をめぐる、質的な記述を蓄積してゆく必要がある。

## 註

- (1) 最近の学校資料によれば、学校全体では就職と進学が半数ずつであるが、その傾向は学科によって異なっている。進学者のほとんどは入学難易度の低い県外の私立大学や短期大学、専修学校に進学している。
- (2) しかしながら、この地域・学校は、たとえば大手自動車メーカーの存在によって高卒技能職求人豊かな名古屋圏と同じではない。というのも、毎年少数ながら電力会社など大規模な会社への就職を勝ち取る生徒を輩出してはいるものの、A工業の生徒が地元で就職できる企業の多くが、当該地域を拠点とする中小零細企業だからである（教師へのインタビュー調査より）。
- (3) 1980年代の男子高校生にとって、「大企業技能職」は「技術職」に次ぐ「セカンドベスト」として認識されていた（荻谷 1991、p.89やp.151を参照）。
- (4) 尾川ほか（2012）によると、調査が行われたA商業高校では「生徒の98.2%が何かしらの部活動に参加しており、退部率も3.7%と極めて低い状況になっている。単純な比較はできないが参考までに述べると、西島らがおこなった3地域の調査（西島 2006、p.23）では、専門高校の入部率は東京が31.5%、新潟が44.6%、静岡が89.9%となっており、A商業の入部率は極めて高いといえよう」。

## 参考文献

- 荒川葉、2009、『「夢追い」型進路形成の功罪—高校改革の社会学—』東信堂。
- 有海拓巳、2012、「地方／中央都市部の進学校生徒の学習・進学意欲—学習環境と達成動機の質的差異に着目して—」『教育社会学研究』第88集、pp.185-205。
- 千葉勝吾・大多和直樹、2007、「選択支援機関としての進路多様校における配分メカニズム」『教育社会学研究』第81集、pp.67-87。
- 堀有喜衣、2003、「学校・校外生活と無業者」耳塚寛明（研究代表）『高卒無業者の教育社会学的研究（2）』平成13～14年度科学研究費補助金研究成果報告書、pp.33-44。
- 荻谷剛彦、1991、『学校・職業・選抜の社会学』東京大学出版会。
- 荻谷剛彦ほか、2002、「大都市圏高校生の進路意識と行動—普通科・進路多様校での生徒調査をもとに—」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第42巻、pp.33-63。
- 片瀬一男、2005、『夢の行方—高校生の教育・職業アスピレーションの変容—』東北大学出版会。
- 長須正明、2003、「富山県呉西地区の高校進路指導」耳塚寛明（研究代表）『高卒無業者の教育社会学的研究（2）』平成13-14年度科学研究費補助金研究成果報告書、pp.78-94。
- 中村高康編著、2010、『進路選択の過程と構造—高校入学から卒業までの量的・質的アプローチ—』ミネルヴァ書房。
- 日本労働研究機構、2003、『学校から職場へ—高卒就職の現状と課題—』調査研究報告書No.154。
- 西島央編著、2006、『部活動—その現状とこれからのあり方—』学事出版。
- 尾川満宏、2011、「地方の若者による労働世界の再構築—ローカルな社会状況の変容と労働経験の相互連関—」『教育社会学研究』第88集、pp.251-271。
- 尾川満宏・尾場友和・山田浩之、2012、「現代高校生の生活と進路意識—ある地方商業高校を事例として—」『教育学研究紀要（CD-ROM版）』第57巻、pp.493-528。
- 富江英俊、1997、「高校生の進路選択における『地元志向』の分析—都市イメージ・少子化との関連を中心に—」『東京大学大学院教育学研究科紀要』37巻、pp.145-154。

